

ないでもっているのだろう。そこら辺を書いたり発表したりする論集がないし、実はそこら辺に、しっかりした基礎がうずもれているものだ』という考えからこの花粉を発刊する事になった……”と記している。体裁はほぼ現在のと類似するが、欧文による表現は一切なかった。本文は21頁で、多田洋の花粉とは何か、三木順一のミツバチと花粉、古屋正子のイネの開花と授粉、市河三次の浮彫『ナツメヤシ授粉』の謎、渡辺光太郎の柱頭反応覚え書き、西豊行の試験管内受精、体細胞受精について、鈴木洋の山形からの手紙、資料などで年額300円であった。確かに論文はなく、自由な形式をとり現在の同誌のあり方とは違っていた。ちなみに、最新号はNo. 20, 1987-3-20発行である。又、研究会では当初月2回の集会をもち、それが後で1回となったものの原則的には引き続いて行なわれており、最新号の記事によると第252回(1987-1-24)が渡辺光太郎の自家不和合性の分子生物学、であったと報じている。

●東京花粉研究会(1968→1978)。この会の発足に当って同好会誌『花粉と孢子』のNo. 1, 1969-1発行、ガリ版刷り、16頁、B-5近似、の巻頭言に徳永重元、当時地調、は“東京在住の花粉学関係者が……、8月頃(前年の1968、筆者注)石田肇、川崎次男、私の3名が会合し、……肩のこらない研究会として続けてゆきたい……”とある。第1回は1968-9-1、東大小石川植物園、柴田記念館に21名が集まり、会を発足し、石田が世話人となって例会を持ち、年会費500円とした。尚、オリンパス光学K.K.から援助を受けた。このNo. 1には9, 10, 11, 12月の4ヶ月分の例会での話題提供者、演題、要旨とか会員名簿、ニュース、その他が載っている。ほぼ、この形式を続け、最終号、No. 16, 1978-12発行、に至るまで107回の例会をもった。また、No. 11, 1973-12発行、からは活字刷りとなり、当初は年2乃至3回会誌を発行していたのが後半では1回になった。最終号と銘打ったNo. 16の編集後記に、“おいそがしい所発表後の原稿をまとめていただく必要がなくなりました”, と幹事が述べているのが印象的である。

他にも日本古生物学会での植物化石研究会やアレルギー学会、その他の関連する会があるのであろう。尚、この記事を作成するに当り、徳永重元、渡辺光太郎の両氏から種々昔の話をお伺がいし、それらが大層参考になった。両氏に感謝致したい。

(相馬寛吉)

## 〔書評〕

DEL COURT, P.A. & DEL COURT, H.R. 1987. *Long-term Forest Dynamics of the Temperate Zone*. 439 pp. Springer-Verlag, New York.

著者らは米国の新進気鋭のおしどり研究者である。DEL COURT, P.A. は地形・環境学を主な専門とするが、夫人の DEL COURT, H.R. は生態学・花粉学を主な専門とするから、2人からなる本書が植生史研究全般にわたる幅広い内容をもつであろうことが予想されるであろう。事実、本書は、植生史研究の中で最新の位置を占める植物群の移動や拡大、forest population dynamics などにおいて生態学の理論と豊富な植生史の情報を駆使して独自の分野を切り開いている。多少難解なところもあるが、この方面のこれまでのモデルが的確に紹介され、米国を主とするこれまでの forest dynamics に関する植生史研究を概観し、また新しい理論を学ぶのに欠かせない好適書である。

(辻 誠一郎)